

○中国文化学会平成12年度

シンポジウム「西域と中国」発表要旨

西域と中国

司会者 安藤信廣

中国文明は伝統的に他の文明からの影響を受けにくく、  
「中華意識」という孤立主義のなかにあつた、とする見方が古くからある。そうした見方はすでに様々の立場から批判を受け、その有効性に疑問の声があがっていると思われる。もとよりそれを全面否定することはできないが、中国文明と他の文明との出会い方について従来よりも踏み込んだ議論が必要になってきているのは事実である。本年のシンポジウムでは「西域と中国」という題名のもとに、中国文明と異文化との出会い方について、多角的に話し合うこととした。「西域」をとりあげたのは、この地域が古代から近代にいたるまで（もしかすると現代にいたるまで）中国にとってきわめて重要な意味を持つ異文化世界だからである。その西域を中国がどのように受けとめたのか、西域が中国文明にどのような意味を持ったのか、という視点から討論した。

今回議論の対象とした「西域」は、通常よりも広い概念

である。普通、西域とは中央アジア地域を指すが、今回はこの地域に加えて、オルドス地域・モンゴル高原をも含んで用いている。「西域」という語は、すでに漢代から用いられているが、シルク・ロードを含む中央アジアを中心としながらも、より広い範囲を指す場合が多いのである。

加藤敏氏の発言は、辺塞詩に描かれた西域のイメージの変遷を跡付け、盛唐の時代に生き生きとした描写が現れたことを、「辺塞の日常化」によるものとしている。大塚秀明氏は、西夏文字のなかで漢民族を表す文字をとりあげ、それが一種の蔑視を表現していること、しかもそれを漢字の文字構造をまねて表現せざるを得なかったこと、そこに華と夷の混交と逆転が見えることを指摘した。堀池信夫氏は、元代儒教のなかに陸学的な傾向の流れが見え、それが禅宗の影響のもとにあつたと考えられること、さらにその後にはモンゴル帝国の寛容な宗教政策があつた、とする。いずれも刺激に満ちた発言だった。それぞれの時代にヘウエスタン・インパクトがあつたこと、それを中国文明が深く自らの物にしてきたことが、討論を通じて浮かび上がってきた。

（東京女子大学）

西域が唐代の文学にどのような影響を及ぼしたのか、西域との接触によって変化が生じたのか否か、という問題を、辺塞詩に焦点を当てて考えてみたい。

唐代以前の辺塞詩に描かれた西域は、イメージの世界であり、砂漠が広がり、砂塵が舞い、夕暮と夜が支配し、胡笳や羌笛が響きわたる陰鬱な戦場であった。そこは立功・報君の場であるにもかかわらず、出征兵士は愁いに沈み、故郷では女性たちがその帰りを待ちわびているのであった。辺塞詩が多く書かれるようになるのは、斉・梁時代以降であり、この頃から辺塞が文学の題材として一定の位置を占めるようになる。

唐、太宗の時代には、積極的な対外政策が取られるようになり、西域の文化が流入し、人々の関心がしだいに西域に向くようになった。こうした状況のなかで、唐代の辺塞詩は、従来の辺塞詩を継承し、悲壮感を基調としつつも、一種の異国情緒を伴った美的表現として完成されていった。また、実際に西域を経験し、その体験をもとにした辺塞詩が書かれるようになったことも大きな特色といえよ

う。

実際に西域を体験した詩人である岑参の辺塞詩については、現実の経験が、生き生きとした西域の情景の描写という、それまでの辺塞詩に見られなかった表現を生み出したことが指摘されているが、その辺塞詩の根底には「世界への信頼、辺塞の日常化」ということがある。また、岑参の官吏としての意識は、西域にあつても変化することはない。彼は西域にあつても唐の官吏としての日常を過ごしていたのである。

安史の乱後、唐王朝が求心力を失うとともに、辺塞詩に描かれた西域の世界はふたたび陰鬱なイメージを伴うものとなっていた。確かに李益らの作品には、求心力ある唐王朝の風を表現しようとする表現が見られるが、あえて過度の誇張した表現を用い、抒情をより悲壮なものにしようとする、そのこと自体が盛唐の風がもはや過去のものであったことをよく物語っている。西域が辺塞詩に及ぼした影響は、盛唐の時期をもって終わつたと言つてよいであろう。

## 夏文字からみた中国文化

大塚秀明

唐帝国滅亡後の中国は、これまで夷狄蛮戎とさげすんできた周辺異民族に支配されて、北方では契丹族の遼(916-1125)が建国し、中国は五代十国の時代(907-960)を経て、やがて宋により統一される。しかし宋の西北にはタングート族の西夏(1038-1227)が、北方には女真族の金(1115-1234)が建国した。これまでなかった「国境」という言葉が誕生したのもこの時期と言われている。こうした西域或いは西北からの異民族⇨異文化は中国文化にどのような影響を及ぼしたのであろうか。本発表では、西夏で作られ研究が最も進んでいる西夏文字を通して、西夏人は中国文化をどのように認識していたのか、そして中国人は西夏文化を、或いは周辺異文化をどのように見ていたのかを考えた。

今日まで知られている西夏文字は約六千字(『夏漢字典』所収字数)、漢字を模倣して作られたはずなのに一字として漢字と同形の文字がない。契丹文字には同形文字があり、女真文字には漢字の面影が僅かに残るが、西夏文字にはそれが全く見られない。こうした漢字⇨中国文化を認め

ぬ姿勢は「漢族」を意味する西夏文字に「虫けら」を意味する部首が使われていることから窺え、これはちょうど漢民族が周囲の異民族の呼称に「けものへん」を付けていたことに似る。しかし西夏には詩に夏文字で翻訳されたおびただしい数の漢字文献が残されており、なかには中原では散逸してしまった文献の西夏訳もある。つまり「虫けら」とさげすみながらも中国の文献は貪欲に翻訳を進めていたのである。

中原に暮らす中国人は、武力では異民族に敗れ、領土を割譲される境遇に置かれるが、中国文化人の異民族⇨異文化に対する見方として、時代はやや下るが『中洲集』の作者である元好問の考えを当時の典型的なものとして紹介した。

(筑波大学)

草原の国際宗教会議と元朝の宗教寛容および儒教

堀池信夫

元代の大儒といえば、許衡と呉澄である。許衡が相当純粋に朱子のリゴリズム路線を継承したのに対し、呉澄は陸学に接近していた。しかし一方では、陸学の勢いは宋末で絶えてしまったとの主張もある。とすれば、呉澄の陸学接近には、従来の見解に加えて、もう少し何らかの要素を考えるべきであろう。

元代の江南・江西方面では、禅が盛行していた。呉澄はそうした風気の中で、朱子学に新しい息吹を吹き込まんとして学問を形成した。その際、彼の目に飛び込んだのが、当時見向きもされていなかった陸学であった。陸学には心学的要素があり、禅の思想に通底する所があった。

当時の禅の盛行の背景にあったのが、元朝の宗教政策だった。元朝はチベット仏教を尊崇したが、その他の宗教を否定することもなかった。元は、まず征服国家・軍事国家であり、理念が先立つ国家ではなく、武力と経済力による現実主義国家であった。ハーンを中心とする支配者層は、宗教に対して現世的勢威の保護・強化を期待し、その力をもつ宗教を常に探求していた。そうした宗教観は、元朝創

始以前の草原の帝国の時代からすでに始まっていた。

モンゴルがユーラシアに力を露わにし始めるころ、モンゴルのオルダ（ハーンの宮殿）には諸宗教の著名な宗教者が入り込んできた。グユク・ハーン（憲宗）は、そこで詔を下して、諸宗教をカラコルムに集め、どの宗教が最もすぐれているかの国際宗教会議を開催することにした。この国際会議を嚆矢にモンゴル元朝においては帝室の声がかりの宗教会議（宗教論争）がしばしば行われたのであった。元朝の宗教寛容の政策はこのようにすでに草原の時代から醸成され、その結果として南方での禅の盛行がもたらされたのであった。

さて、呉澄はそうした風気の中において、朱子学徒としての学問を進めていたのであった。それゆえに彼の学問には北方の国子監のリゴリスティックな朱子学とは異なる面が現れており、またそれは当然主流的国子監の学問からは遠い位置にあった。いずれにしても、呉澄の思想が育まれた背景には、禅の隆盛があり、その禅の隆盛のさらなる背景には草原のモンゴル時代以来の元朝の宗教的寛容が存在していたのは確かなことであつたといつてよいと思われる。

（筑波大学）